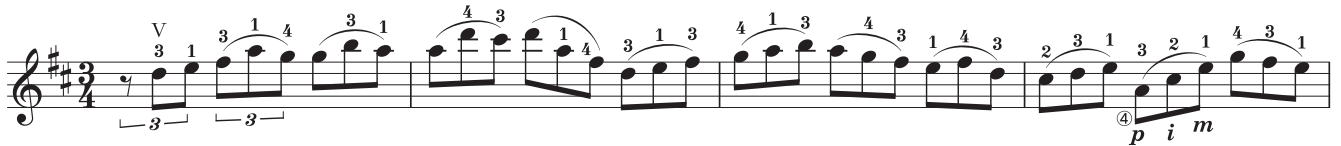
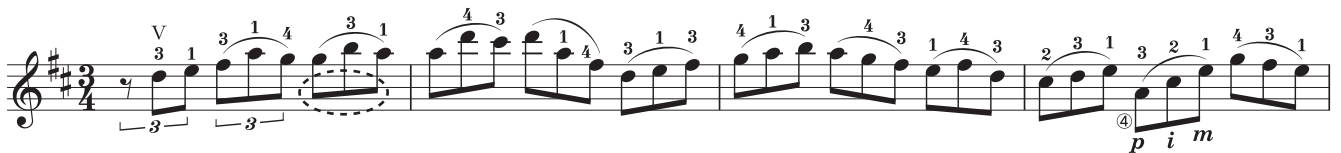


# 連桁の伝統



連桁という術語は専門音楽家にとってさえ耳慣れない言葉かも知れません。「れんこう」と読みますが、旗に代わって複数の音を束ねる太い線のことです。「符桁」と言われることもあるようですが、楽譜ソフトの Finale や Sibelius の日本語版ではこの「連桁」という言葉が用いられています。

英語ではこれを Beam と言いますが、光線というよりも梁<sup>はり</sup>という意味で、何かを強く結びつける部材ということかと思えます。譜例は私の編曲の一部ですが、ここでは3つの音符をビームが束ねています。そして、このビームの扱い方一つでも楽譜の見え方が大きく違ってきます。テッド・ロスという米国の楽譜彫版職人の著した「楽譜彫版の技法と作業工程」という書物には、ビームについての詳細な分析と解説が見られますが、その部分は実に興味深く、そして有益です。絶版になっている本ですが、Amazon の中古市場で入手して読み進め、そのロス氏の教えに耳を傾けつつ作成しました。



このビームの様式感覚は我が国ではどうだったのかというのが私のここ数年間の疑問でしたが、驚くべきことに、大正時代に出版されていた楽譜に素晴らしい浄書技術を見ることが出来ます。妹尾<sup>せのお</sup>楽譜といまして、竹久夢二の絵が表紙に使われていることから古本市場で高騰しているのも、おいそれと原本は買えませんが、コピーを目にしてそのレベルの高さに驚嘆しました。また、昭和 20 年に出版されたバイオリン譜を入手しましたが、その柔らかく端正な姿も後年の多くの手書き浄書が遠く及ばないものかと思えます。しかし、そのいずれもビームに関する限りはロス氏の説く伝統や、西欧の老舗出版社のスタイルとは少し異なります。それはそれとして、私も多くの演奏家や教授者と同じく輸入楽譜で育ってきた者

原則は多岐に渡りますが、最も重要なものはビームの両端が五線ラインに接するか、またはラインの真ん中に乗るように書くというものです。次に重要なのは、ビーム両端と五線ラインとの間に小さな隙間を作らないという原則で、これを守るとなると、ほぼ全てのビームを手動調整しなければなりません。

印刷精度が低かった頃からの伝統で、その僅かな隙間にインクが滲み、ビームの両端が不明瞭になってしまうことを避ける為の措置ですが、おそらくはロス氏はその本を世に出した時でさえ、実際に端の隙間がインクで埋められてしまうことはなかったでしょう。下に Finale デフォルトで連桁最大傾斜 24evpu 設定にした状態を掲載しましたが、単に小さな隙間が生じているというだけで、楽譜彫版職人達が忌み嫌ってきた姿だと言えるでしょう。特に点線で示した冒頭小節3拍目のビームは西欧の楽譜彫版術では悪形の典型とされてきたもののようです。

ですから、やはりショット社が出版していたポンセやテデスクの彫版楽譜などに心を動かされます。また、ほとんど全てのビームに調整が必要になると言っても、実のところは Finale 日本語版では Ver.2002 から搭載されるようになったプラグインを巧く使えば劇的に省力化できます。もとより完全無欠な自動化は無理で、仕上げの手編集と、その為の正確な知識が要りますが、今はこのスタイルで出版楽譜を制作しており、編集部やクライアントからも好評価をいただいております。以下に紹介するのはショット社版で、ソルのメヌエットの一部分ですが、この角のない、滑らかで落ち着いた姿は、私にとっての一つの理想です。

2008年1月 梅本雅弘



D.C. al Fine